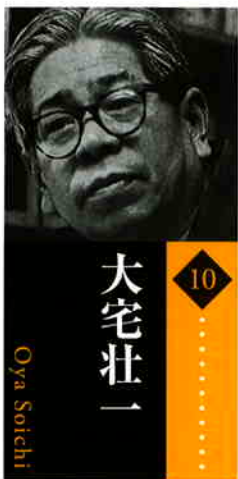
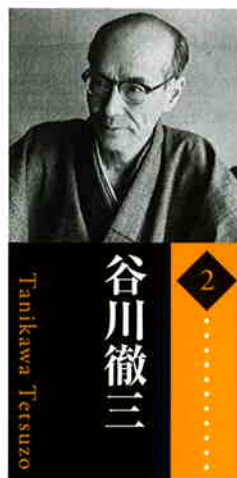
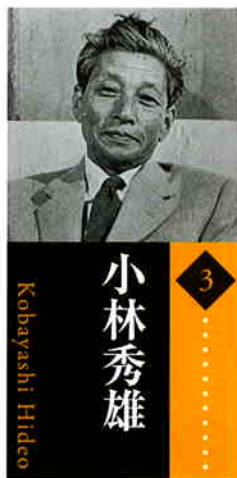
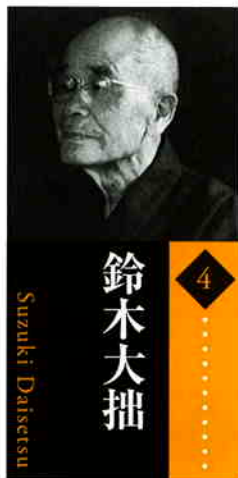


哲学者、評論家、社会学者、文学者、教育学者、
経済学者、ジャーナリストなどの
「知性」をめぐるさまざまな言説を人物ごとに集成!

「知性」という概念やその機能の時代的变化を超えて、
人間や社会のあり方の本質に迫った
高く深い知性を提供!

日本人 の 知性

第1期 ● 全10巻



「こ数年新しい年の来ることに、何か新しい期待と恐れとをもってその年を迎えるのが、世界中のならわしとなつたように私には思える。新年には昔からそういうならわしがあったと人は言うかも知れない。しかしそれとはちがうのである。私自身のことを言っても、私は青年の時代を過ぎてからすでに遠く、そういう感情を久しく抱かなかつたにもかかわらず、こ数年というもの、来る年ごとに同じような期待と恐れとをもって、その年を迎えるようになったので、これは結局、今日の時代の容易ならぬことを何人も事実の感覚をもって知らされているからである。その意味では常任優性の期待と恐れであると言つてよい。それが新年という特別の折に、多くの人達に改めて顧みられるのである。

この期待と恐れとは共に裏切られて来た。恐れたことも起らなかったし、期待したように事は運ばなかつた。しかし総体として事態はよくなつていゝとはいえない。しば

しば、恐れたことが起るのではないかとまで状態の局部的に緊迫したことはあつても、みんなが大きな期待を抱くような華柄は、ついぞ起らなかつたし、その局部的緊迫を解きうるかの小さな期待さえ、多くは空しくなり終つてゐるが現状である。まだ前途に光明は望めないものである。

まだと私は言つた。私はまだ前途に光明を望むことはできないが、それかと言つて全く絶望はしないのである。私は一層近い未来よりも一層遠い未来に望みをつなく、これは私の人間に対する信頼の根本感情から来るものらしい。私は人間をそれほど愚かな者には思ひえないのである。従つて二つの世界の正面衝突が殆んど全人類の破壊を意味するほどの大破壊をもたらすことがつきりしてゐる今日、そのような結果に事態を迫らむようなこととはないであらうと思つてゐる。しかしそれにもかかわらず、そのような結果に事態を迫らむような契機は今世界に充滿してゐるのである。破局を避けるためには、われわれの意志と行動とが必要なのである。歴史は歴史の運動法則をもつてゐるけれど、その歴史の運動法則には常に人間の意志と行動とが参与するのである。

私はクエーカーと共に二つの世界の平和的共存の可能を信ずるものであり、その信念の上に立つて世界連邦の構想を説いてゐるものである。しかし現在のままの世界では、

内容見本「2 谷川徹三」(70%縮小)

大正から昭和への移行期、太平洋戦争前後という激動の時代に書かれた各言説から、当時の日本の知的状況、西洋的思想に対する反応、政治的イデオロギーなど、新しく現れた社会の諸相を捉えることができる

現代のグローバリゼーション、ナシヨナリズム、ジェンダー、階層格差などの問題にも通ずる先駆的な視点は、再読により今日の意味を発見させてくれるとともに、新しい視点や感性を与えてくれる

若き世代への言葉

殊に思想する態度について

一 思想する人々の態度

空想する若い人たちの歩みは、やがて岐れ路に行き当たる。その一方は、彼らの空想に乗らない、どうも黒い現実の世界を相手に見る、興味に乏しい、退屈な一筋路であり、他の一方は、その行手に、彼らの幻想の歴史の響き立つのを望む、紆余曲折、千変万化の、飽くことを知らない空想の路である。岐れ路に立つ若い人たちの後者の路を択ぶのは当然であるが、その道しるべに当たるのが、「觀念の天国」に己れを置いてゐる、思想する人々である。冷酷な現実が、いやでもおうでも若い人たちに、前者の路に迫り込ませようとするほど、夢を見ても若い人たちは思想する人々の手招きにひきつけられる。どうも黒い現実の世界よりは、美しい幻の世界こそ、若い命をそこにうち込めたい、美しい幻の世界こそ、若い命をそこにうち込めたい、若い人たちの夢の世界は、現実の世界のアンチセンスで

ある。そこに夢の世界の人的意識がある。現実への無条件降伏者は、歴史の奴隷であつて、主人ではありえない。人間が歴史を作り、歴史が人間をつくるのは、鶏が玉子をうみ、玉子が鶏となるのと、同じであつて同じではない。人間のうむ玉子(歴史)は、親鶏の典型の反覆ではなく、新しい典型の創造である。人間の歴史は、過去の現実への逆転ではなく、新しい現実への進展である。若い人たちの夢の世界は、過去の現実に対する叛逆であり、新たな現実への憧憬であり、その意味に於て、若い人たちの空想は、創造の歴史の胎生期の呻きである。

しかしながら夢は夢である。思想する人々が、ただその若い人たちの夢の世界にのみ呼びかけるところに危険がある。「夢は五臓六腑の疲れ」といふ諺が日本にあるが、実際、夢は生命の疲れであつて、活動ではない。若い人たちの空想も、青春期の活動であるより疲労である。その夢が現実への叛逆であるのも、畢竟、夢の園に於ける自由に過ぎない。「自然」と「理性」との失はれた世界における、倒錯の自由である。

思想する人々は、ややもすれば、その倒錯の自由に呼びかける。文学する人々が、春機発動期の倒錯の恋愛に呼びかけるのと似て、それは人間と人間性にとつて、もっと有用なものを、もっとも有用なものにする魔術である。

著者の専門的な論考のエッセンスが凝縮された内容

日常的視点により書かれた人生論、自伝的随筆、短評など、著者の新しい一面を垣間見ることができる内容

これら2種類が
バランスよく編まれた
1冊

内容見本「7 長谷川如是閑」(70%縮小)

1 亀井勝一郎

明治以来の西洋と日本との間の、知的貸借表といったものがあるとするは、おそらく日本は借方一方ではなかったらうか。西洋の知的資本の莫大な流入のもとに、日本の知識人は重労働を強ひられてきたやうなものである。

「二十世紀日本人の可能性 序説」より

目次

- 二十世紀日本人の可能性
- 序説
- 非寛容の美德
- 革命家の倫理
- 熟練者
- 大都会における知的英雄
- 人間教育の技術
- 東洋への回帰
- 現代文学にあらはれた知識人の肖像
- 内海文三 二葉亭四迷「浮雲」
- 間貫一 尾崎紅葉「金色夜叉」
- 長井代助 夏目漱石「それから」
- 岸本捨吉 島崎藤村「新生」
- 時任謙作 志賀直哉「暗夜行路」
- 矢代耕一郎 横光利一「旅愁」
- 杉野駿介 島木健作「生活の探求」
- 鳴海仙吉 伊藤整「鳴海仙吉」
- 佐々伸子 宮本百合子「道標」
- 大庭葉蔵 太宰治「人間失格」
- 私の美術遍歴
- 廃墟―礎石をめぐる
- 観音菩薩像
- 北斎漫画
- 伊太利紀行
- ミレーの折り
- 美術と文学

亀井勝一郎（かみいかついちろう）

評論家。一九〇七―一九六六年。北海道生まれ。東京帝国大学文学部美学科中退。一九三五年保田与重郎らと同人誌「日本浪漫派」を創刊、ついで「文学界」同人となる。日本の伝統の中に自己と民族の再生の道を探し、古典・仏教美術に深い関心を寄せ、人間の究極的な救いのあり方を求めた。著作に「大和古寺風物誌」「現代人の遍歴」「日本人の精神史研究」など。

2 谷川徹三

5 和辻哲郎

正義の理解なしにただ練習によって正しい行ひをしようとすれば、その行ひは実は正しい行ひではない。正しい行ひをなし得るといふことは、正しさを知ってゐることである。技術は知を含む。知に導かれなければ技術は真に技術であることが出来ない。

「II 倫理学の創始者ソークラテース」より

目次

- I 国民全体の表現者
- 封建思想と神道の教義
- 民族的存在の防衛
- われわれの立場
- 童貞聖母
- 人類の教師
- 倫理学の創始者ソークラテース
- アリストテレスのポリス的人間学
- III 漱石の人物
- 藤村の個性
- 露伴先生の思ひ出
- 鷗外の思ひ出
- 日本民俗学の創始者
- IV イタリヤ古寺巡礼
- 年譜
- 収載論稿一覧表

和辻哲郎（わつじてつろう）

哲学者、倫理学者。一八八九―一九六〇年。兵庫県生まれ。東京帝国大学哲学科卒業。ハイテガー哲学の解釈を通して、人間を人と人の間にあるものとして捉え直そうとする日本の人間観に基づいた「倫理学」を確立する。また、西洋的教養の視点から日本への関心を深め、日本や東洋の思想・文化史研究でも活躍。著作に「古寺巡礼」「風土」「人間の学としての倫理学」など。

6 中野好夫

正直にいつて、ぼくらは、もはや自由への闘いを、ただ手放しのオプティミズムをもって考えることは、とうていできない。それほどにも人類の歴史は、自由の名において多くの悪を犯して来ているのである。だが、大切なことは、それでもなおぼくらは、自由のために闘わなければならないのだ。

「I 自由のための闘い」より

目次

- I 自由のための闘い
- 平和について
- 国民のいない政治

9 小泉信三

悠久なる未来における世界史の果ての状態が、果たしてどのやうなものであるか。それについて私は、いま格別の興味を持つことができない。私の関心はそれよりもはるかに手前の現実世界……において、いかにして今日を昨日よりも、明日を今日よりもよくするかに終始する。

「II 改良と革命」より

目次

- I マルクシズム概観
- 平和論
- 共産主義とソ連国家主義
- 世界の明日明後日
- 内外の平和
- 自信ある国民
- II 日本国民の自尊心
- 暴力に対する剛毅の精神
- 改良と革命
- 人類の進歩
- 独立の気力と遵法の方法
- 徳教のこと
- 新聞の専制
- III 雑誌文化の特性
- 学問の進歩
- 学問・芸術・運動競技（学生の為に）
- アメリカの大学生活
- IV 読書論
- 読書を勧む（学生の為に）
- 読書と文章（年少学生の為に）
- 我が愛読書
- 学問のすすめ

運命の岐路に立ちて
日本人
新聞批判―架空編集局長就任の辞
講和会議に寄す
内灘
人類は見られている
年譜

清水幾太郎（しみずいくたろう）
社会学者、評論家。一九〇七―一九八八年。東京都生まれ。東京帝国大学文学部社会学科卒業。「読売新聞」論説委員などを経て、一九四六年二十世紀研究所を設立、一九四九年から学習院大学教授。社会学・社会心理学の領域に新しい問題提起を行う。平和問題にも強い関心を持ち、講和問題、基地反対闘争、六〇年安保闘争の理論的指導者となる。著作に「社会学講義」「倫理学ノート」「わが精神の放浪記」など。

私自身を知ることとは私自身以外の存在、他の人間を、他の生物を、他の物体を、そういうものの集りである世間や自然を、すべて私を取巻くものを知ることによって初めてできる。別の言葉で、そうしてわれわれの今日に生きる生き方と関聯させて言えば、われわれの住むこの時代がいかなる時代であるかを知ることである。

「IV 如何に生きるべきか」より

目次

- I 日本人のころ
再説日本人のころ
現代は如何なる時代であるか
- II 東西文化交流と日本
戦争と平和
世界連邦政府運動と世界憲法
アジアとヨーロッパ
言志
- III 世界史における現代
私の見た志賀さん
『暗夜行路』覚書
哲学者としての三木清
もろともにかがやく宇宙の微塵となりて
修羅のなみだ
人間孔子
- IV 文学と民衆
政治の文学支配について
国語の諸問題
教養としての文学
如何に生きるべきか

谷川徹三(たにかわてつぞう)

哲学者。文芸・美術評論家。一八九五〜一九八九年。愛知県生まれ。京都帝国大学卒業。一九二八年から法政大学教授。一九六三年から同大総長。この間、和辻哲郎、林達夫らと『思想』の編集にあたる。宮沢賢治の研究をはじめ、芸術・社会・文化など多方面の評論活動のほか、「人類主権」の立場から平和運動に参加する。著作に『感傷と反省』『芸術の運命』『自由人の立場』など。

3 小林秀雄

有効に確実に行動せんが為に、私達生物が自然に適応した結果、知性は現れたに相違ない。有効に行動する為に予見する事、これが知性の目的であり、質を量に置き代へ、連続を不連続に還元する知性の性質もこの必要から当然生れてくる。

「IV 私の人生観」より

目次

- I 「罪と罰」について
ドストエフスキイ七十五年祭に於ける講演
- II 私小説論
ニイチエ雑感
チエーホフ

国民のいない政治
人間の名において
池の蛙と子供たち―「死の灰」問題の一側面―
ある隷属国の悲劇―ボリビア共和国の場合―
真実はつくられるものか
平和を保証せぬ安全保障

私の平和論―小泉氏の「平和論」に答える―
汚された道義性―ミク事件について―
『赤線基地』の問題点

最近の反米感情
基地問題の背後にあるもの
李ラインの皮肉
憲法七年

天皇制について
参院選挙について労働組合へ一言
菅生事件の「戸高節」―公判傍聴の印象と意見―
奇々怪々菅生事件
私の信条

怒りの花束
大学教授という名の人間
大学教授始末記
重役諸君への警告
アメリカ感傷旅行

言語と社会
再建日本と国語の問題
川路聖謨のことども
迷訳ばなし
僕婢奉公訓抄
西園寺さんが来てやで
八角時計

年譜

中野好夫(なかのよしお)

評論家、英文学者。一九〇三〜一九八五年。愛媛県生まれ。一九二六年東京帝国大学文学部英文学科卒業。中学校、師範学校の教師を経て、一九四八年から東京大学教授、一九五三年辞職。雑誌『平和』の編集長として活躍。合理主義に基づく平明で硬質な視点から社会時評を展開し、憲法擁護、反安保、沖縄返還などの運動に尽くした。著作に『人間の死に方』『盧花徳富健次郎』。訳書に『ガリヴァ旅行記』など。

7 長谷川如是閑

生きることを生きるため思想する思想は、手が道具となり、その手の延長として道具が生れたと同じやうに、五体の生活から生れた道具である。……禅僧が「無」の思想に立って、人を行動の世界へなげ込むのとは逆に、行動の世界に立って「有」を獲得するのである。

「V 若き世代への言葉―殊に試走する態度について」より

学問のすすめ
福沢先生の青年時代
森鷗外と社会思想
理論家漱石
水上瀧太郎の文学と実業
文学者と経済学
二人の経済学者(キヤナンとデイイツェル)

人物論五題
西洋風俗
旅中雑感
伯林の記憶
台湾所見
わが人となりし家庭
父と子

好きなものと嫌ひなもの
孤独の時間
人間愛・鳥獣愛
庶民の食物
秋日所感
私の横浜時代
軽井沢

年譜

小泉信三(こいずみしんぞう)

経済学者、教育者。一八八八〜一九六六年。東京都生まれ。一九一〇年慶應義塾大学政治科卒業。英・独留学のち、一九一六年同大学教授となり、経済学論や社会思想史を講ずるとともに、リカード―マクスウェル古典学派を研究。一九三三年同大塾長、近代経済学の日本への普及に努めた。また、戦後は皇太子明仁の教育と皇室の近代化に尽くした。一九五九年文化勲章受賞。著作に『カドオ研究』『共産主義批判の常識』など。

10 大宅壮一

人生というものは必ずしも一回ゲームとは限らない。心がけ次第で二回戦、三回戦もありうるのである。……一回戦はより多く環境に支配されるものだが、二回戦は自己の自主性と責任において行われるべきである。

「無思想人」宣言 多角的人生経営論より

目次

- 「無思想人」宣言
- 「無思想人」宣言
- 戦争と敗戦によって試された日本人のモラル
享楽の経済学
- 「あわや」心理学
- 乱世遊泳術
- 多角的人生経営論
- 投機的日本
- 日本占領をめぐる十二の大きな失敗
ソ連と日本共産党

「有」を獲得するのである。

「V 若き世代への言葉―殊に試走する態度について」より

- III 小説論
- ニイチエ雑感
- チエーホフ
- モオツァルト
- ゴッホ展に際しての講演
- 雪舟
- 真贋
- 金閣焼亡
- 私の人生観
- 西行
- 実朝
- 中原中也の思ひ出
- 蓄音機
- スポーツ

年譜

小林秀雄（こばやしひでお）

文芸評論家。一九〇二〜一九八三年。東京都生まれ。東京帝国大学在学中、富永太郎、中原中也、河上徹太郎らと交遊するとともに、ランボー、ボードレー、ヴァレリーらの思想に大きな影響を受ける。一九二九年「様々な意匠」が認められ、以降時代の流行に抗して文学の原質を探る評論家として活躍。精神と現実とが衝突する場面で織りなされる知性について追求する。著作に「無常といふ事」「考へるヒント」「本居宣長」など。

4 鈴木大拙

人が実在の底知れぬ深淵を測ろうとするには、人間の感覚経験や知的作用のみでは不充分である。悟りをそれに加えなければならぬ。機械的・量的に加えるのではなく、いわば化学的に又は質的に加えなければならぬ。

「禪の研究 二、悟り」より

目次

- 禪の研究 一、禪経験の研究について
- 二、悟り
- 三、公案
- 四、般若即非の論理
- 五、仏教哲学における理性と直観
- 六、華嚴思想と禪的大悲
- 一、今北洪川と釈宗演
- 二、西田幾多郎

年譜

著作目録

鈴木大拙（すずきだいつつ）

仏教学者。一八七〇〜一九六六年。石川県生まれ。東京専門学校に学び、鎌倉円覚寺の今北洪川について参禅。一九九七年渡米、アメリカの宗教家ポール・ケイラスに身を寄せて仏教書の著訳を進める。一九二二年英文機関誌「アースタン・ブディスト」を創刊、海外に仏教思想を系統的に紹介・普及する活動に努めた。著作に「大乘仏教概論」「禪と日本文化」「日本の靈性」など。

目次

- I 近代思想の展開
- 現代知識階級論
- 日本のヒューマニズム
- II 日本に於けるファシズムの発展
- 東洋文化と西洋文化
- 大陸と島国
- III 礼の美
- 心と形
- IV 美の倫理性
- 美の倫理性
- V 大学および大学生
- 若き世代への言葉―殊に試走する態度について
- VI 新聞とジャーナリズム
- 日本の新聞

年譜

長谷川如是閑（はせがわによせかん）

ジャーナリスト、評論家。一八七五〜一九六九年。東京都生まれ。本名、万次郎。一九八九年東京法学院（中央大学の前身）卒業。陸羯南の新聞「日本」の記者を経て、大山郁夫と雑誌「我等」を創刊。自由主義批評家として「モクラシ」思想を鼓吹し、日本および日本人（日本の文化的伝統と国民性）の探求をライフワークとした。一九四八年文化勲章受章。著作に「日本の性格」「現代国家批判」「ある心の自叙伝」など。

8

清水幾太郎

人間は作られたものであると共に作るものである。……人間は社会によって作られたものであるにも拘らず、而もまた社会を作るものである。或は社会によって作られたがゆえに社会をつくるものとして働くことを得るのである。

「I 新しき人間」より

目次

- I 悪について
- ヒューマニズムと社会革新
- 新しき人間
- 二つの現実
- 二つの環境
- 歴史的精神
- 組織の条件
- 深淵から
- 現実の再建
- 教育の問題と方法
- 環境に関する試論
- 匿名の思想
- 生死の断層

投稿的日本人

日本占領をめぐる十二の大きな失敗

ソ連と日本共産党

「コロコロニガシオン」

投稿的日本人

麻薬時代

クイズについて

賭博論

売春史は繰り返す

死刑は私刑である

憲法改正は美容手術

戦前・戦後・戦中派

動乱について

再軍備と知識人

新しい女性

男女経済学

新しい女性

婦人界異聞

M+Wは世界的現象か

性的失業論

ロマンス・グレイ

新版 夫を成功させる法

華々しき離婚

新結婚観を提唱する

日本の新しい世代誕生

現代教育五つの迷信

大人の悪徳と社会悪

教養はどこにいても身につけられる

職業創作論

息子への言葉

日本の新しい世代誕生

文学をめぐって

文学の大衆化と娯楽化

「文学」と「感情」との関係

近代文学の都会性

事実と技術

文芸批評の座標について

知的労働の集団化について

文学青年の社会的意義

文学改造論

年譜

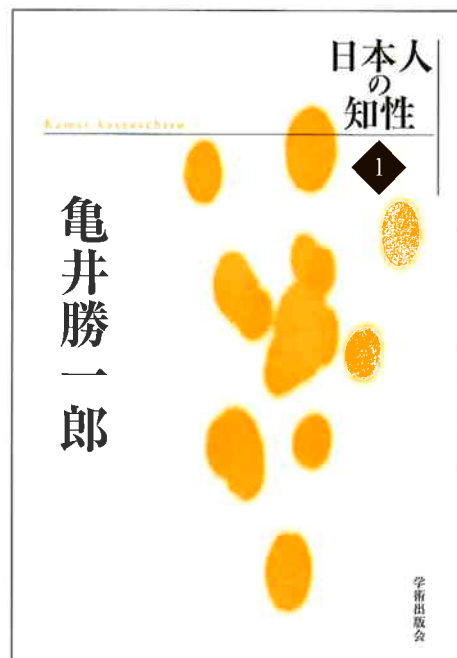
大宅壮一（おおやそういち）

ジャーナリスト、評論家。一九〇〇〜一九七〇年。大阪府生まれ。東京帝国大学文学部社会学科中退。在学中、賀川豊彦らの影響を受け、日本フェヒアン協会創立に参加。一九二六年文芸評論家としてデビュー。戦後は幅広い社会的・進歩的視点から軽妙で辛辣な評論活動を続け、「駅弁大学」「一億総白痴化」などの流行語を生み、マスコミで活躍。一九六五年菊池寛賞受賞。著作に「無思想人宣言」「共産主義のすすめ」「炎は流れる」など。

日本人の知性

第I期全10巻

- 1 亀井勝一郎
- 2 谷川徹三
- 3 小林秀雄
- 4 鈴木大拙
- 5 和辻哲郎
- 6 中野好夫
- 7 長谷川如是閑
- 8 清水幾太郎
- 9 小泉信三
- 10 大宅壮一



底本「現代知性全集」(日本書房・1958~1961年)

A5判・上製・カバー装・各巻平均280頁

セット定価：50,400円(本体48,000円+税)

各巻定価：5,040円(本体4,800円+税)

関連書目
紹介

美しく豊かな言葉に彩られた思索のヒントがきっとみつかる

生きることの美しさと哀しみ、考えることの喜びと苦しみがつまった名著、待望の復刊!!

田中美知太郎

『生きることの意味』

人間として生きること、思索することの深さ、厳しさ、そして喜びを、流麗な文体と美しい言葉で語り継ぐ滋味あふれるエッセイ

四六判・薄上製・216ページ

定価 1,680円(本体1,600円+税) ISBN978-4-284-10233-9

申田孫一

『ものの考え方』

健全で人間的な悩みを知ることの必要性を説き、その悩みを解決するヒントを与えることを目的としてつづられた素朴で心温まるエッセイ

四六判・薄上製・204ページ

定価 1,680円(本体1,600円+税) ISBN978-4-284-10234-6

■発行■ 学術出版会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2 TEL 03-3947-9153 FAX 03-3947-9157
http://www.gaku-jutsu.co.jp

■発売■ 日本図書センター

〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2 TEL 03-3947-9387 FAX 03-3947-1774
http://www.nihontoshu.co.jp

注文書	日本図書センター	注文数
書店印	〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2 TEL 03-3947-9387 FAX 03-3947-1774 http://www.nihontoshu.co.jp	
	「日本人の知性」第I期全10巻 ISBN978-4-284-10241-4 セット本体 48,000円+税	セット
	1 亀井勝一郎 ISBN978-4-284-10228-5 本体 4,800円+税	冊
	2 谷川徹三 ISBN978-4-284-10229-2 本体 4,800円+税	冊
	3 小林秀雄 ISBN978-4-284-10230-8 本体 4,800円+税	冊
	4 鈴木大拙 ISBN978-4-284-10231-5 本体 4,800円+税	冊
	5 和辻哲郎 ISBN978-4-284-10232-2 本体 4,800円+税	冊
	6 中野好夫 ISBN978-4-284-10236-0 本体 4,800円+税	冊
	7 長谷川如是閑 ISBN978-4-284-10237-7 本体 4,800円+税	冊
	8 清水幾太郎 ISBN978-4-284-10238-4 本体 4,800円+税	冊
	9 小泉信三 ISBN978-4-284-10239-1 本体 4,800円+税	冊
	10 大宅壮一 ISBN978-4-284-10240-7 本体 4,800円+税	冊
●お名前	●ご住所	●お電話